

日本の世界遺産資料に関わるエコ・コミュニケーション分析

英語を通じた環境教育への貢献を目指して

吉田 安曇

1. 研究背景とリサーチクエスチョン

近年、翻訳における環境的概念の表現を文体的観点から批判的に評価する「環境文体論 (ecostylistics)」が注目されている。本領域は、Stibbe (2021) が提唱した「エコ言語学」の枠組みに基づき、翻訳や言語表現を単なる情報伝達的手段としてではなく、環境的価値観や自然観を形づくる営みとして捉える視点を特徴とする。特に、世界遺産の観光説明文は、多くの人々に自然や文化の価値を伝達する重要な媒体である。そのため、文体や翻訳の方法が読者の環境意識に与える影響を及ぼすのかを明らかにすることは、環境教育や異文化理解の観点からも重要な研究課題である。本発表では、世界文化遺産「日光の社寺」における金剛桜についての日本語と英語の説明文を比較分析する。また、文体や語調の変化が読者の環境意識や異文化理解に与える作用についても考察し、本研究で得られた知見を基に新たな環境教育への貢献を目指す。リサーチクエスチョンは以下の三点に整理される。

1. 原文と英語訳の違いは何か。
2. 環境意識を高める内容や文体的特徴とは何か。
3. エコ・コミュニケーションはどのように環境教育へ寄与しうるか。

2. 先行研究

まず、景観・環境の描写スタイルに関しては、Douthwaite et al. (2017) が文学や観光言説における文体的特徴について論じている。また、寺西・吉田 (2024) は、日本の世界遺産の観光説明文において、機械翻訳と人間による翻訳とを比較しながら、文体や語調がどのように環境意識を変容させるかを分析している。さらに、Virdis (2022) は「エコ文体論 (ecostylistics)」という概念を提示し、自然や環境を描写する言説が社会的・倫理的意味を帯びることを明らかにした。翻訳と文体の役割については、Cronin (2000) が紀行文を中心に、翻訳が文化的意味を再構成する営みであると論じ、翻訳は環境意識や倫理観の形成にも寄与し得ることを指摘している。また、松浦ら (2021) は観光サインの多言語翻訳を分析し、語用論的な誤用や言語間の影響を報告している。以上の先行研究は、翻訳は単なる言語的変換にとどまらず、文化的意味を再編し、言語教育や異文化理解に深く関与する営みであることを示してきた。しかしながら、これらの知見を環境教育の観点から応用・発展させる試みは未だ限定的であることから、本研究は新規性と学術的意義を持つ。

3. 研究手法

本発表では、分析事例として輪王寺の「金剛桜」を取り上げる。輪王寺は、世界文化遺産「日光の社寺」の資産の一つとして、二荒山神社、東照宮とともに登録されている。具体的には、金剛桜について記述された日本語及び英語の説明文について、その内容や構成、及び文体的特徴を比較分析する。研究手法としては、①世界遺産公式サイトの調査、②現地訪問、③日本語原文と公式英語版の収集、④比較分析の手順で行った。なお、分析枠組みとして、斎藤 (2007)、Boase-Beier (2018) 等を参照した。

4. 分析結果と考察

まず、日本語による金剛桜の説明文を示す。なお、便宜上、各文に番号を振っている。

- (1) 黄芽、白花大輪の山桜で花香が強く、樹齢は約 500 年。(2) 地際より数本の支幹に分かれ、特異の樹形をなし、その基部の周囲は約 5.7m に及ぶ。(3) 繖房状に 3~4 花を着け、花茎は約 3.8 cm で、極めて大輪。
- (4) 花弁は円状で長さ約 1.7 cm。(5) 巾は約 1.6 cm で、花弁の縁は重なりあっている。(6) 明治 14 年 (1881)、当寺門跡彦坂謙厚大僧正により現在の地に移植せられたもので、大僧正の諡号、金剛心院に因んで命名されたもの。
- (7) 昭和 11 年 (1936) 5 月 10 日、三好学理学博士の調査により、山桜の勝れた突然変異種に属し、加うるに樹形の著しきにより国の天然記念物として指定を受く。

次に現地に設置されていた案内板 QR コードから読み取った英語による説明文を記す。

- (1) This cherry tree was already more than 400 years old when it was moved here in 1881. (2) Hikosaka Jinko (1833–1897),

the abbot of Rinnoji Temple, decided to move the tree from a nearby location to stand in front of the Sanbutsudo. (3) The Sanbutsudo, or hondo (main hall), had recently been moved here following the government-mandated separation of Shinto and Buddhism that began in 1868. (4) The abbot chose the tree for its size and stately appearance. (5) Jinko and others were worried that the tree would not survive the move, and so every morning Jinko chanted sutras in front of it. (6) Soon the tree began to thrive, and four new trunks sprouted from the base. (7) The tree was named after Jinko's posthumous dharma name, Kongo Shin-in. (8) Kongo is a Buddhist term meaning "diamond" or "vajra" and suggests indomitability and stubbornness. (9) The Kongo Cherry Tree is thought to be a unique, hybrid cultivar of ornamental cherry. (10) The thick clusters of large, white flowers bloom in late April to early May. (11) It is designated a Natural Monument.

日本語原文は、文語体による簡潔かつ短い文で、硬い表現が目立った。また、花卉の大きさや香り、樹齢、突然変異種としての希少性など、植物学的・生態学的情報が客観的に記述されており、学術的厳密さを重視している。これに対し、輪王寺公式英語版は、住職による祈祷や命名由来といった逸話を中心に構成し、植物学的特徴を大幅に省略している。その結果、文化的背景やナラティブ構造を強調し、外国人読者に理解しやすい文体へ変容していた。分析結果を以下の表にまとめる。

人間と自然の つながり	・人間と自然との精神的な結びつき (Sentence 5) ・金剛桜を歴史・宗教的意義を持つ存在として描写
自然の主体性の 暗示	・木が住職の期待に応えたかのような描写 (Sentence 6) ・木に名前を与えることで、人格・尊厳を付与し、自然の主体性を尊重 (Sentence 7)
文化的・宗教的価値の 共有	・金剛桜が宗教的・精神的価値を持つ存在であることを強調 (Sentence 8) ・自然物を文化的文脈に位置づける典型例
保存と継承の 意識	・木が守られるべき価値ある存在であることを示す (Sentence 11) ・人間と自然の共生や未来への継承という倫理的メッセージ

5. まとめと今後の課題

本研究では、翻訳が単なる言語変換ではなく、文化的フレーミングの再編成を伴う営みであることを明らかにした。特に英語の説明文は、生態的情報の正確性を一部犠牲にしつつも、外国人観光客の理解促進や興味喚起に有効であり、環境教育の価値を持ちうることを示唆された。さらに、本研究の知見は教育的応用の可能性を持つ。例えば、日本語の観光説明文と英語版の翻訳を比較し、どのような情報が省略され、どのような文化的補足が加えられているのかを考察させる比較読解活動は、学習者に翻訳の役割を批判的に捉えさせる契機となる。また、外国人観光客に響く表現を意識しながら観光案内文を作成するライティングタスクは、実践的な異文化コミュニケーション能力を育成する。さらに、SDGsに関連づけて環境保護の重要性を踏まえつつ翻訳表現を工夫することで、持続可能な観光やエコ・コミュニケーションに関する理解を深めることも可能であろう。

今後の課題としては、第一に、科学的厳密さと文化的物語性とのバランスをいかに取るかという問題が挙げられる。第二に、英語以外の言語翻訳における傾向を比較することで、文化差や地域性がどのように環境表現に影響するのかを検討する必要がある。これらを踏まえ、より多様な事例を対象とした批判的分析を進めることが求められる。

引用文献

Boase-Beier, J., Fisher, L., & Furukawa, H. (2018) *The Palgrave handbook of literary translation*. Palgrave Macmillan.

Cronin, M. (2000) *Across the lines: travel, language, translation*. Cork University Press.

Douthwaite, J., Viridis, D. F., & Zurr, E. (Eds.). (2017) *The stylistics of landscapes, the landscapes of stylistics*. John Benjamins.

Stibbe, A. (2021) *Ecolinguistics: Language, ecology and the stories we live by*. Routledge.

Viridis, D. F. (2022) *Ecological stylistics: ecostylistic approaches to discourses of nature, the environment and sustainability*. Palgrave Macmillan.

斎藤兆史 (2007) 『翻訳の作法』 東京大学出版会.

寺西雅之・吉田安曇 (2024) 「姫路城をめぐる観光コミュニケーションの分析—翻訳、文体、異文化理解の視点から—」 *JAILA Journal* 第10号 pp. 14-25.

松浦美佐子・黎曉妮・徐沅廷・全円子・湯文 (2021) 「観光サインの多言語化における語用論的誤り」 井尻昭夫・大崎絃一・三好宏 編『「寄り添い型研究」による地域価値の向上』 大学教育出版. pp. 90-102.